‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

９９号 1995.6.13
文・編集・発行
恋 怪子

WORDS：MORRIE（ROCK N'ROLL NEWSMAKER 1992年5月号より）

ロマンティックな、
余りにロマンティックな

「“あとは野となれ山となれ”と“完璧な空”と“広すぎる風景”。この３曲はタイトルの『ロマンティックな、余りにロマンティック的な世界、その中で自閉してしまうような指向性に対して非常に悪意を込めて書いたものなんですが。で、その３曲を否定する曲、否定しながら次は私はこう行くぞという宣言っぽいのが“破壊しよう”や“ファルスよ永遠に”や“心地よい雨”なんです。特に“心地よい雨”は大本の３曲のロマンティックな世界に対して、さよならするぜって意思表示ですね。そういう構造になってる」

「今回、ある程度誤解されるのは承知の上で、身体から始まるみたいなフレーズ使ってるんですけど、その辺、もっと言い直せば、実感から始まるってことなんですよね。頭の中だけで観念的に考えることは、そういうことはデッド・エンドの初期は多々あったけど、なんていうか現実的に意味をなさないんですよね。やっぱり」

――そうするとモーリーさんの中で、いまロマンティックというのはどう捉えているんですか。

「僕の言うロマンティックはね、――例えば前に『浪漫者のディレンマ』っていうビデオ出したんですが、あのときちょうど湾岸戦争してたでしょう。で、みんなリアルだ、リアルだって言ってたけど、そういう物言いの方がよっぽどロマンティックやぞって言いたかった。戦争は地球の遥か彼方でやってるわけで、実感なんでない。こうやっていま居るビルの隣にバーンと爆弾落ちてくるわけじゃないし。それをテレビで見てあたかもリアルに言うのは間違いやと。だからあのビデオはそういう短所を述べたつもりだった。（略）僕は観念的な世界ではなく、この身体の実感から始まりたい方やから」

これはMORRIEが３年前に前作「ロマンティックな、余りにロマンティックな」を出した時のインタビューで語ったことの一部分であるが、今回の新作「影の饗宴」を聴くすこし前にたまたまこれを読み直す機会があった。この「ロマンティックな、余りにロマンティックな」を出したときのライブ（1992.5.26 日本青年館）の途中で私はライブで平衡感覚がおかしくなって眩暈がするという初めての経験をしたが、それはいま思うとMORRIEのいう「悪意」にやられたからかもしれない。私はよほど意識をたしかにもっていないと「観念的な世界で自閉してしまう」から。

このインタビューを読んで、MORRIEの言っていることと少し意味がちがうが、観念と実感とのちがいについて考えさせられた。私は観念でものごとに接すればほぼ安全でいられる。つじつまあわせができるから矛盾をはらみにくい。ところが実感を頼りにすると、そういうふうにすっきりとはいかずに、わけがわからなくなって混乱してしまうことが多い。

ここ何ヵ月もの間、ライブで「コレッ」っていう手応えがほとんどなくて（だから常になくCDを何枚も買って、よく聴いていた）、「まぁ、よかった」といえるライブは２、３あったけれど、すぐに印象がうすれてしまうし、それまでいいと思っていたいくつかのバンドも「なんかなぁ」って感じ。去年のライブが最高によかったレニングラード・カウボーイズ（4/3,4,6 新宿リキッド・ルーム、4/10,11 大阪IMPホール）もつまらなくて。こうなると、「つまらない」という自分の実感を信じることがおぼつかなくなってくる。「バンドに問題があるのか？自分に問題があるのか？」という答えの出ない自問自答に陥ってグッチャグッチャ状態。以前だったら、なんだかんだとバンドを批判したり、あれこれ自分を分析したりして、さっさと観念で片付けてたんだけど…。

おそろしいのは「何も感じない」という状態なのだ。「何も感じない」のは「生きていない」に等しい。だからなにか他のものでもいいから骨をガリガリとかじるような、震えるような実感が欲しくて、いつもならあてにしない雑誌の記事をてがかりにして、BRUTAL TRUTH（2.21 クアトロ）とGUITAR WOLF(2.10 SHELTER)のライブに行ってみた。BRUTAL TRUTH も前座のS.O.B もどっちがどっちだか区別がつかないくらいおんなじような一本調子で、ステージ・ダイブの伴奏みたいで全然ものたりなかったし、あちこちで「スゴイ」とか「轟音」って書かれているGUITAR WOLF も音楽は型どおりで退屈。戦慄がない。BRUTAL TRUTHもS.O.B もGUITAR WOLF も、観客との間にあるのは「予定調和の嵐」（たしか筋肉少女帯の歌詞にあった言葉）。

ふだんあまり映画は見ないのだが、タイトルもポスターも強烈なので「もしかしたらスゴイかもしれない」と思って、「ナチュラル・ボーン・キラーズ」（オリバー・ストーン監督）に行ってみた。マスメディアをからかっている冒険活劇と思えば笑えるけど、あんなことならべつに教えてもらわなくったってわかってることだし、陳腐だ。登場人物がみんな饒舌で、その饒舌以上に語りかけてくるものが何もない。黙ったまま、一人で、次々と人を殺していく「ヘンリー」（だいぶ前に見た映画）が語りかけてくるものの大きさや深さ。人間の不可解さが語りかけてくる戦慄さ。そういうものがない。タイトルとポスターにだまされた。「ナチュラル・ボーン・キラーズ」のすぐあとで見た「ガルシアの首」（サム・ペキンパー監督）のヴァイオレンスにはまだ説得力があった。ガルシアの首が布袋のなかで腐っていくにつれて、ベニーという主人公の男が潜在的にもっている暴力性がジワジワとほんものの暴力になっていくのがよくわかるし、画面いっぱいの銃口がこちらに向けられたラストシーンにはハッとさせられる迫力があった。ヘンリーとちがって、ベニーはまっとうな男であるが、しかし２人とも独自の個人という重い存在感がある。「ナチュラル・ボーン・キラーズ」のミッキーとマロリーは、モデルは実在の人物だというのに、存在感が薄くウソっぽく感じる。監督の人間のつきつめ方のちがいだ。

こんなふうにあれこれやってみても、結局自分に問題があるのかどうか結論は出なかったが、４月３日のSLAYERのライブでやっと答えが出た。

LIVE：SLAYER 1995.4.3 中野サンプラザ

はじめの一曲で全身総毛だった。唯一無比の、SLAYER、というものがそこに存在った。トム・アラヤのヴォーカルがひときわすばらしかった。「サンキュー」と言うときと、曲のタイトルを言うときと、曲の簡単な説明をするときの、静かでやさしい口調と笑顔が、曲がはじまるとバキバキッと変わって目をみはらされる。ヴォーカルもすばらしいけれど、ベースを弾いている姿は圧巻。５年前の前回のライブにくらべるとトム・アラヤの存在がきわだっていた。といっても、他のメンバーが弱いというのでは決してない。ヴォーカルをいかすバランスがすごくよくなったからだと思う。

はじまって40分くらいで立っているのがつらくなって椅子にすわって聴いた。アンコール前までで１時間強だったけれど、ヘトヘトにくたびれた。SLAYERのパワーについていけなかった。パワーといっても、音が大きいとか、叫んでいるからとかで出すようなパワーではない。エネルギーを出すパワーがものすごいのだ。

SLAYERのステージは、私がそのとき希望しうる最高のものだった。

いいライブというのは、あとからそれを振り返ったとき、自分の席がステージから遠い近いに関係なく、すぐ目の前の手の届くところに視えてくるものだが、この日のSLAYERのライブを思い出すと、トム・アラヤの歌う姿が、ベースを弾いている姿が、そしてやさしくて厳しい表情が、いつでも目の前に現われてくる。SLAYERのすばらしい演奏とともに。

SLAYERのライブで、そのすごさに「我を忘れる」のではなく「我に返った」。それまで自分がどんなに我を忘れていたかを思い知らされ、我に返った。コリン・ウイルソンが「アウトサイダー」のなかで「他人との関係をのさばらして、自分本来の孤独をうっかり忘れてしまう人間は、阿呆の天国に住んでいるのだ」と書いている「阿呆の天国」で我を忘れていた。自分の実感を信じきれずにグチャグチャしていた。SLAYERの演奏で実感したことが「感じる」ということなら、他のほとんどのものに「何も感じない」のは当たり前だ。

それが現実だと思って他人とつくりあげていたもの、すなわち阿呆の天国は、幻だったことに気がついた。その現実にはもう感じることのできるものはない。そして幻はSLAYERのパワーで滅した。同時にその幻の現実の他人も滅した。幻は滅した。「幻滅」した。幻滅のあとには「自分本来の孤独」が残った。さぁ、これからだ。